とんぼのめがね

あきつ松風通信
第187号
2023. 3. 12

「使徒の働きの学び」(65)

「正義と節制とやがて来る審判」(使徒の働き24:1-27)

岡井 勲

「数日後、フェリクスはユダヤ人である妻ドルシラとともにやって来て、パウロを呼び出し、キリスト・イエスに対する信仰について話しを聞いた。しかし、パウロが正義と節制と来たるべきさばきについて論じたので、フェリックスは恐ろしくなり、「今は帰ってよい。折を見て、また呼ぶことにする」と言った。また同時にフェリクスはパウロから金をもらいたい下心があったので、何度もパウロを呼び出して語り合った。2年が過ぎ、ポルキウス・フェストゥスがフェリクスの後任になった。しかしフェリクスはユダヤ人たちの機嫌を取ろうとして、パウロを監禁したままにしておいた」

24章は、パウロが暗殺団の魔の手から、パウロの甥の密告そして千人隊長クラウディウス・ルシアの迅速で、正しい判断により、ローマ軍隊の護衛によって救出され、ユダヤ総督フェリクスのもとに送られました。そこにおいてもエルサレムのユダヤ人たちは、弁護人を立てパウロを訴えますが総督もルシアの正確で公正な報告により、パウロの訴えがユダヤ教の宗教的な理由によるもので何らローマ法に反するものでないことを理解します。このフェリクスは、解放奴隷の出身ながら、クラウディウス帝の寵臣である実兄の引立ての情実によってユダヤ総督に任命された運のよい男で、ユダヤ統治も5年目になる。能吏である一面、権力をカサにユダヤ人に圧制を加える傲岸さと、ワイロを要求する奴隷出身の卑しさを兼ねそなえた政治家であった。ルシア隊長の清廉なローマ軍人精神に比べると、ローマをやがて堕落させる原因にもなった腐敗政治の典型とも言える政治家でもあった。パウロがワイロ要求の標的とされ、ノラリ、クラリと裁判を長びかせたため、2年もの長期に亘り、パウロはカイザリアに幽閉されてしまったのである。

今までのパウロの行動を見て来た私たちは、パウロが一刻もじっとしていない人物に思えるし、実際17年余の伝道旅行の間、ビーバーのように忙しく働き、数知れぬ教会を建て上げて来たのでした。1年半の滞在でコリント教会とアカヤの諸教会を、3年の滞在でエペソ教会とアジアの諸教会を建て上げて来ました。それなのに2年もの間、幽閉され、無為に過すなんて事が、パウロが我慢できたでしょうか。ある人は、その間に獄中書簡が書れた、と言う人もあり、ある人は、余りも忙しかった彼の生活に与えられた、晩年のゆったりとした時間の中で、ピリポや4人の娘伝道者たちとの豊かなクリスチャン・フェローシップがあったに違いない、と言います。前回初めて出て来たパウロの姉妹や甥のこともあり、パウロの肉親との交流も密にされたのかという想像も働きます。総督がパウロの金に目を付けていたと云う、それはどんなお金だったのであろうか。パウロが伝道中の自活の働きや諸教会からの献金はエルサレム教会にすべて献げられました。パウロの前半生について考えると、生れながらのローマ市民権を持ち、エルサレムへの長期遊学、彼の豊かな教養は、彼がかなりの資産家の出身である事を匂わせます。そして、彼の姉妹や甥など親戚の登場となると、彼にはかなりの遺産相続があったのではなかろうかとも想像されます。ですから彼にとっての2年間の幽閉期は必ずしも無駄ではなかった。最後のローマでの働きの為の身心共に豊かな良い準備期間と思えなくはない。時に牢獄が豊かなものを産み出す契機になります。ジョン・バニヤンは牢獄中に「天路歴程」や「恩寵あふる記」などの名作を書きました。想像的なお話はそこまでにして、今日の中心的メッセージに移ります。主イエスの裁判の時も、一人の貴婦人の姿がかいま見えます。ピラトの妻の話しです。彼女は夢で主イエスのことを見て、夫のピラトに警告する記事があります。

「この義人（イエス）にはかかわらないで下さい」と。しかしピラトは妻の警告を忘れ、自分が無罪と信じる人をユダヤ人の恫喝に屈し、有罪としてしまったのです。（マタイ27:19）

パウロの場合、フェリクスの三番目の妻ドルシラが夫と共に登場します。裁判とは関係なく、私的にパウロの話しを聞きに来たのです。フェリクスも5年のユダヤ統治で、この道「イエス・キリスト信仰」のことはある程度知っていたと思われます。それはユダヤ人のドルシラからの影響もあったに違いありません。ドルシラが夫にせがんで実現させたとも考えられます。ドルシラの生いたちを考えますと、彼女の悩みや憂愁、夫婦関係の中にある微妙なすき間風などがすけて見える気がします。そして、パウロがなぜ「正義と節制と来たるべき審判」について話したのか。それを今朝は考えてみたいと思います。

ドルシラは、福音書の冒頭のイエス誕生物語に出て来るヘロデ大王（東方の博士たちの訪問と、ベツレヘムの嬰児虐殺を命じた）のひ孫に当ります。父のアグリッパ1世がヤコブを殉教の血祭りにし、ペテロをも投獄し、そして突然虫に噛まれて急死した時（12:23）彼女はまだ6歳であった。彼女は16歳でシリアの小国エメサ王アジジスに嫁いだ。たいへんな美人だった。彼女を見そめたユダヤ総督になったフェリクスが、魔術師を使う手管により無理やり離婚させ、彼の三番目の妻とした。フェリクスが妻ドルシラ、20歳になっていた、を連れてパウロに面会を求めたのは、パウロの事情のことではなく、自分たちの問題の解決のために来たのであると、総督という公的立場からパウロに対するのでなく、私的な家庭問題の解決に、パウロが証しする「イエス・キリストの道」（福音）を聞くことで解結したいという求道の姿が示されているのかも知れません。パウロはそれに対して、3つの点を挙げて話しました。①は「正義」についてです。それは今パウロが裁かれている、ユダヤ律法を破ったとか、ローマ法を犯したか否を問題にするものではなく、神の前に正しか否かであって、今日私たちが「福音」として学ぶ、罪あるゆえに神の御前に出れない罪を、イエス・キリストの十字架による罪の赦しと、キリストの復活による新生によって正義とされる義についてであった。②の「節制」は、この夫婦にとって最も解決すべき問題だったであろう。ローマ人であっても、他人の妻を奪うことはローマ法によっても罪であり、まして、ユダヤ人ドルシラにとっては、「姦淫の罪」としてモーセの「十戒」を犯す重罪であり、その事のゆえにドルシラの悩みがあったと思われる。彼女の血筋は、冷酷、不信心で鳴らしたヘロデの血筋であることも彼女の憂愁を深くさせていたかも知れない。同じように悩み「キリストの道」を求めた日本の戦国武将の妻だった女性がいる。細川ガラシャである。彼女は信長を討った明智光秀の娘で、彼の同僚の細川家の長男忠興に嫁したが、父の謀反のゆえに、中は離別され、孤独で悩んでいた時キリシタンの侍女を介してキリスト教に入信した人でした。パウロの説く人間が守るべき節制の徳は彼の胸にこたえたことでしょう。③つ目の「来たるべき審判」は現実の問題として心にせまるものだったでしょう。パウロが裁判の中で提示した「復活の問題」とも深く関連します。復活は、義しい人も、罪人も共に来たるべき終末には復活し、裁きを受けなければならない。フェリクスは自分の業状に照してみて恐しくなって、「この話しは折りを見て、また聞くことにしよう」と言い、パウロの話しを折ってしまいました。フェリクスは、パウロの説教で悔い改めるどころか、彼から賄賂をせしめようと裁判を2年も延期し続けましたが、ユダヤ人の不満が原因で任を解かれ、ネロ帝によって重く罰せられる所を、兄の帝への取りなしによって事なきを得たと伝えられています。ドルシラについては何も記録がされていませんが、憶測をたくましくすれば、強請めたのは彼女の方だったから、パウロのことばが心にとどき、ガラシャのようになったかも知れません。記録によれば、ドルシラとフェリクスの間には一子をもうけたが、79年におきたウエスヴィオスの噴火により、ポンペイで死んだとされている。その前の70年には、ローマとの戦争によりエルサレムは破壊されユダヤ王国は滅びました。パウロの「審判」の説教は、その悲劇を予言することになりました。